

学習能力発達の支援 (II)

太田 祐周

何か新しいことや、新しい何かをする仕方などを知る時、そして又その活動の成果として新しい知識や技量が生み出される時、学ぶことができる。そのために、読み、聞き、見つめ、験し、遊び、用いる等という活動をするが、単に活動をしてみるというだけではなく、その活動の仕方として聞き方や見方、読み方や験し方などを自覚して、将来役立つような働きを産み出すように努める場合、その活動を学習活動と言う。

このような学習活動を習慣的に行い得るようになることが、教育を受けたと本当の意味で言うことが出来ることであるが、それだけでなく、更にその意味を深化した形で、学習活動を自覚的に行い得るようにすることが、今日生涯学習体系としての教育の全段階の目標として尊重されねばならなくなっているところに、重大な問題があると言わねばならない。

学習者は、知識や技術を詰め込まれるだけでなく、みずから重要な知識や技術を展望し選択して、その理解・摂取をはかる自主的で積極的な活動の主体となることが、教育そのものにおいて求められているのである。押し込まれた知識や技術の混み合いの中で、却って全体の見通しや選択の自由を失っているのが、単に受験体制の虜因となっている学校の生徒たちだけでなく、深刻な変換期の社会制度や生産組織に適應しかねている一般の大人たちの実情であるのではなかろうか。

この袋小路と格闘して、これを突き破る力は、もはやどのようにしても出来合いの知識や技術にはないことが、日々生々しいまでに気付かれつつある正にそのさなかで、生涯学習の必然性に面と向かっているのが、現代である。毎日毎時その学習活動の唯中にこそ開かれた世界があり、開かれた光の中に歩み出る努力と工夫に立ってこそ、われわれ自身でありうるのではないだろうか。

学習者は、自分の中の「密室」を突き破って、朝日の輝きの中から夕日の静もりの中に至るまで、船舶の自由な往還の送迎によって生かされ開かれる「港」へと、自らを作り変えて行かなければならない。ベルボームの示唆によれば、「密室」から「魅惑する港」へと、みずからを切り拓いて行くところにこそ、「学ぶ者」の在り方があると言う。

我々は前論文を承けて、ジャン・ベルボームの学習支援の計画に関する構想から、この問題について大きな示唆を得たいと考える。その際、自覚的学習活動を主体的かつ恒常的に推し進めて行くことができるのは、主として高等学校と大学および成人教育の段階である点に基いて、この段階での学習を対象としたベルボームの「学習能力発達の援助計画」を分析し、それを通して全学習者に対して示唆的な論旨を引き出すことに努めたいと考えるものである^{1),2)}。

1. よりよく学ぶためには

(1) 教えられる場合。

- 1)、学ばねばならぬことは何か、明確な観
念をもつこと。

期待される行動を身につけることができるのは、その行動をみずから発見し、その行動について正確な表象をもっている場合だけである³⁾。教えを受ける時いちばん大切なことの一つは、自分が何を期待されているかを握むことである。何が目標として示されているかに留意し、出される質問や問題を通して、その目標がどんなもののかの理解に努めることである。大事なのは、結末を記憶することか、それともその結末の利用の仕方を知っていることかは、どんな教授状況の中にあるのか、またどんな学習活動が提案されているかによって、決まる⁴⁾。

しかし教師の立てる目標だけが重要なのではない。学ぶ者自身がどんな目標を立てるかが問題である。教授目標と学習目標との対立は、一層包括的な人間形成目標の中に統合されて、そこからの分化発展として把え直されなくてはならない。教えられることを本当に利用することができるのは、その教えに従うのは何のためかということ、自分が人間としてはっきり知っている場合に限られるのである⁵⁾。

- 2)、状況を利用することによってだけ、求められている行動を実現することが出来る。

教授状況とは、期待されている行動を可能にする情報や訓練が必要としている状況のことである。テキストや講義から、何をしたらよいかを聴き出すことが大切であるが、何をしたらよいかを明らかにすることは、上掲の1)で求められているところである。ここで大事なのは、課される訓練をうまく利用して、自分自身のやり方を改善して行くことである。

しかしこれに加えて、実際の教授状況とは別の状況を、学習者がみずから作り出すことが大切であろう。友達に質問したり、計画や

要約をこしらえたり、違った資料やマニュアルを探し出して、目的実現の手段を自分で発見したりすることが、各人としての仕事となるであろう。そのために求められる創造的態度や生産的方法とは、既に知っていることと今探していることとを結びつけ、近づけることであって、これこそ学習の本質的な活動に外ならない。状況を利用して学習することが求められているのであるが、そのためには、状況から必要な情報を引き出し、すでに自由に使える知識にこの情報を突き合わせると共に、更にその結果を記憶して、活かし直すのである⁶⁾。

- 3)、始めて実行したことをやり直すこと、
即ち自分を訓練すること。

一度することは、未だ知ることにはならない。しなくてはならないことを理解して、それを始めてすることができたとしても、後になってもう一度することが出来るとは限らない。した後で、やり直すことができるためには、自分を訓練しなくてはならない。理解するとは、未だ知ることではなく、学習の出発点にすぎない。真に知るためには、自分を訓練しなくてはいけない。問題に対しては、〈あらゆる方向からの〉アプローチが必要だからである。

そのやり方を知るためには、違った仕方でもやり直して、次第次第に自分自身のやり方を作り上げて行くことが重要である。先生の言うことを理解するだけでなく、して欲しいと言われている行動を作り上げると共に、更にそれを越えて自身の方式を作り出すことが大切であり、そのためにこそ先生の評価が必要になるのである⁷⁾。

- 4)、結果を評価し、やり方の欠陥を補い、
学習のためのあらゆる障害を探り出す
こと。

このように見て来ると、事は決して容易ではないことが分る。勉強しても、またしなければならぬことを表現したり、状況を利用したりすることが出来たとしても、それを一つの行動として産み出し定着させることは出

来ない。障害が色々ある。自分に何が出来るかと判断したか。するように指示されていることと、それを対照させてみたか。自分の学習手続きを分析してみたか。学習するために、一体何をしたか。——様々な問題をはっきりさせることができたなら、自分の欠陥がどこにあるかが分るだろう。

第一の困難は、態度にかかわる。自分に対する態度、教師に対する態度、学習対象や学習状況に対する態度。——学習計画の実行に当たって、自分をどのように評価しているか。出来ないだろうと見込んでいる場合、達成のチャンスは乏しいであろう。

——学習が成功するためには、教師や援助者との間に、良好な「契約関係」が成立している必要がある。彼らは何をしてくれることが出来るだろうと、我々は考えているのだろうか。

——ある学習内容や学習状況に、我々は本当に興味をもっているのか。実際に大事なことがそこにあるのだろうか。

これらの問題に対する積極的な態度は、学習成功の条件である。これを発展させる工夫が望まれている。

第二の困難は、目標にかかわる。目標は、十分明確になっているか、自分の役に立つように、自分の言葉で、目標を言い表わし直しているか。目標は実際に、実習を推し進めるための、自分のための目印しになっているか。自分が何処へ行くか分っていなかったら、目的に達するチャンスもまた少ないであろう。結果がどうなるかに真剣に関心せずにおられないこと、結果が自分にとっての重大事になっていることが、必要なのである。

今一つの困難は、すすめられてる学習状況の活用の仕方に関してである。読み方は、注意深かったか。話されたことは、ノートに取って、自分用に組み立て直したか。再現しなければならないことの観察は、十分だったか。大事なことは、記憶して活用することができそうな手を打ったか。問題の理解に必要な知識が、自分の手持ちかどうか、等。——困

難の原因に向って方向づけてくれるような、自分に対する設問の数々を忘れてはならない。それは、自分の学習手続きを客観的に把えることが出来るように距離をとることであり、学習手続き改善の方法である。この自覚の行為を通してよりも遠くへ行くことは、我々には出来ないであろう⁸⁾

(2) 自分自身の形成を進める場合

目的と、それに達するための状況や活動を選び決定するのは、ここでは教育者から独立した学習者自身である。しかし上記の教えられる場合においても、よりよく学ぶための核心的な問題が、畢竟するところ自己の発見であり、自己の喚起であることが、改めて注目に価するであろう。

1)、学習の結果として作り出されることを、はっきりと知ること。

全学習を方向づけるのは、最後に修得されるべき行動として示される目標である。目標は慎重に定義して、曖昧さのない記述をする必要がある。複雑な言表の要はないが、最後のところ一体何がしたいのか、相当詳しいデータが要する場合もある。例えば英語やスキーがうまくなって、それはどうしたいのか。国際的活躍や自己表現の世界拡大、健康の増進や技量の増強、等。学習当初の目標は野心的すぎて、多分、途中で修正されるだろう。しかし自分の全活動を方向づけるのは⁹⁾、自分が作った観念であることには変りがない。この観念が、目標に達したかどうかを判定する評価の基準となるから、自分の全行動を統制する目標として、その観念を明確に表現する努力の必要性は大きい。

2)、学習を可能にする状況、求める行動を生み出し得る状況を、作り出すこと。

2次方程式や英会話やサッカーの学習に適した状況を選択することは、時間的余裕や物質的条件や仲間関係の拡がり等に左右される。

3)、これらの様々な状況の中で、何をするのかを、はっきり自覚すること。

状況ごとに情報を集め、その情報を自分用に作り変えて記憶するが、自分は何をするの

か、何故そうするのかを、はっきり言表できる時には、色々の段階の仕事に携わることが出来るよう 読書や観察で、不十分な情報に別の資料を結びつける。様々なデータを整理して、図式や図表として表わし、意味がもっと分るようにする。状況を活用して学習を進めるに当っては、学習の内容だけが問題ではない。学習の手続きや、その際の精神的活動も重要である。そこにこそ実は、学習で出会う困難の出発点がある。

4)、自分の手続きの欠点を補い、出会った困難をのりこえること。

欠陥としては、情報の不十分、身体的訓練の不足、推理や記憶の面での力量の欠損があげられる。学習の困難の始まりにある問題とは、自分の可能性への信頼の薄さ、ねばり強さの欠如であると共に、反対にまた自分への過信、助言者への信頼の薄さと関係がある。学習活動全体を通して何が起っているのかについて、明晰な意識を保持することが大切である。その意識の明晰さこそ、学習の手続きの全体を方向づけ直し、学習活動を完全に統御するための本質的条件である。そのための前提は、自分に対して距離を取ることであり、これこそ成功の条件の一つである。

以上の助言は、どのような学習の場合にも、必ず実験し実行することが望ましいと、ベルボームはすすめている。教えられる際には、自分の側に生れることについて、何が期待されているか。また練習に努めることは、どんな点で自分の助けになるか。実に自分に求められていることを、自分としてはどのように行うのか。

自分自身の形成が問題である場合には、学習の結果として、どんな力量をもつに至ることを望むのか。また読む、試す、観るなどの中、どんな状況の助けをかりて、望む結果に達しようとするのか。更に状況をどのように利用するか、自分には何が欠けているのか、等々。

これらの問いに答えるのが、「学習能力発達援助計画」に外ならない。

II、学習能力発達援助計画

上記助言の遂行を目ざして、捕足的知識と練習問題とのまとまりの形で、ベルボームは15課題を設定する。

眼目は、一気にではなく、少しずつ進むことである。一日に全部ではなく、毎日新しい課題の問いに答え、翌日その課題と自分の答えとを読み合わせる。読み返えす内容に馴染みが深くなったら、そこで新しい課題にぶつかって行く。このことのためには、3週間が要る。時どき衝突を感じた課題に立ち戻っては、全体を見直すのがよいが、最後のテーマと結論が助けになるであろう。いつも言われていることを実行に移しては、心に深く留めておくべきことと、実際にしなければならないこととに、目を見開いておくこと。学習能力改善の3週間は、十分その苦勞に価すると、ベルボームは信ずるのである。

以下は、このプログラムの終りにやれるようになる行動を、「目標」として立てたものである。

1)、学ぶとはどういうことかを言い表わし、そこからして自分の学び方を書き示すことが出来る。

2)、色々な学習の仕方を的確な文章として記述した上で、実施することが出来る。

3)、上記1、2の作業経験を活用する形で、学習手続を言い表わすことが出来る。

4)、そこで言い表わした学習手続を実施し、その結果を評価して改善に努めることが出来る¹¹⁾。

練習問題は専ら目標の達成を助けるものである。ほかの練習問題も加えて、大事なものだとして自分が発見したことは、あらゆる機会を捕えて実施すべきであろう。

〔課題1〕 第1テーマ：学ぶとは、
 ということか。

1)、始めるためのアンケート。

学習については、気づいていないとしても、既に多くのことを知っている。その確認とし

て。

(演習題 1. 1) 最近、何を学ぼうとしたか。そのために何をしたか。必要だったのは何か。助けてくれたのは誰か。どんな結果が得られたか。その学習を違った仕方で行うことが出来るか。もう一度やるとしたら、どう始めるか。

これらの問いに答えた後で、友達や隣人に尋ねてみる。集まった答えと自分の答えとが、どう違うか。このアンケートの結果をまとめたのが、次の 2) である。

2)、〈学ぶこと〉の特徴。

学校や実習や養成などの折だけでなく、コンピュータやビデオ、テニスやロッククライミングを、一人で、友達と、また会やクラブなどで学ぶ。見つめ、読み、他人を観察するなど、どんな瞬間にも学ぶことが出来るが、何時もその結果を知るわけではない。学習には、学んだことという結果と、そのためにする手続きとがある。ウィンドサーフィンをして、うまく行かないことを学ぶ。色々経験してみても、色んな解釈をしてみるとという手続きをふむが、風や波が一寸あると、バランスを取ることが出来ないという結果に出会う。つまり学習の成果が学習の目標に呼応し得るかが問題であって、目標と、目標に達するための手続きや足取りと、実際に達した結果との、三点から考察することが必要である。

学習目標を達する様々な方法のうち、どれを取るかが問題である。すぐ手を出してみたり、色々な試みをしてみたり、或いは先ず以て助言に耳を傾けたり、自分でやる前に説明付き実演を注目したりする。或いはまた、試行—他人の試行の観察—試行—説明。様々な仕方で行うことが出来るということであり、ある人では成功することが、他の人ではうまく行かない。自分で見つけるのを好む人と、案内して貰うのが好きな人とがある。

今一つ注意すべき点は、人はそれぞれ同じ学習状況から、何か違ったものを引き出すことである。作文の時、様々の考えの集め方に苦勞する人と、集めた考えのまとめ方に専念

する人との違いがある。学校教育方法として、大変違ったことが強調される。対話、表現ないしは寧ろデッサン。——こういうことを眺めていると、学習するとは大変個人的なことだと言うことが見出されるだろう。即ち人はそれぞれ違った仕方で行い、同じ状況で別のことを学ぶ。

しかし学習意欲をもって何かする場合にしか、学習はなされえないことを、確かめておかななくてはならない。しかも学ぶためには、何をしたらよいかをよりよく決めることが出来るように、助けることが出来ると思わなくてはならない。とは言え、何がその人に最もふさわしいか発見するように助けると、言っているのではない。先ずやってみて、何が本当により早くより良い結果を得るように学ばせてくれるかを発見するのは、学ぶ人その人の仕事なのである¹²⁾。

3)、この指摘から、何をしたらよいか。

(演習題 1. 2) その例として、今読んだばかりのことから、何が大事で、何を心に留めておくべきかを、思い出すこと。そのためには色々違った仕方があるだろう。読んだことを熟考し、見なくても思い出せる大事な言葉を、幾つも書き留めてみる。

(演習題 1. 2a) 大事だと思う語・句を読み直して、下線を引く。その下線部分を思い出してみる。——大事な語句に会う度に、書き写し、彩り下線を引く。——数節をカッコに入れ、欄外に棒線する。これらは、テキスト中の大事なことを記憶するための方法である。

(演習題 1. 2b) その中で、自分に合った方法はどれか。結果が一番よくなる仕方はどれか。

これらのことは、違った状況や学習の中で試してみる必要がある。そして同じことを試みた仲間と、一諸に観察してみることの意義は大きい。

4)、実行のためのアンケート・プラン。

学習を問いつめて、その本音を吐かせること。学習とは、何かとても把握しきれなくて、

形を変えたり、色んなものを取り組み合いになったり、そこには無いと思う時出て来たりすることは、誰でも知っている。他方、学習が満足すべき結果に達するためには、事態を自分の手でしっかりと把握ねばならない。

以下の諸課題を通じて、学習はどのようにして現われるか、学習するためにはどう取り組んだらよいかを、見分けられるような助力を、ベルボームは構想する。しかし又、違った風にも取り組めることも示して、その時最もよく成功することを、読者自身が試みるよう励ましてもある。

5)、留意点。

一番心に留め易いことは、書物や報告の中で重要だとして、自ら発見したものであり、下線、カッコ、ノートがその際の役に立つ。

(演習題 1. 3) 本課題の中で、何を発見したか。心に留めたいのは、その中の何か。

6)、実施点、再実施点。

(実践題 1.) 今している学習か、終わったばかりの学習を選んで、学習するために何をしたかを述べる。——その実践記録は、少くともノートの一頁分になるよう、記述すること。そうしておけば、自分の学習を何度となく振り返ることが出来る。それは(演習題 1. 1) でしたことを、更に詳しい細部にまで渡って、もう一度することになろう。

【課題 2】 第 2 テーマ：発達段階を乗り越えさせるものとしての学習。

ここでは、人間形成の諸段階において、学習が演ずる役割に注目する。

1)、人間形成の諸段階。

人間形成も学習活動も、発達段階の刻印を受ける。読書能力形成、授業による諸教科間の移動、ある職業能力を保証する卒業証書。それぞれの段階は、その都度の学習の達成であり、結果である。新しい可能性は、知識や技量の蓄積の中から出て来る。人間の成長は、資本に転化して蓄積されうる単位ないし価値の単位でもって、有機的に組織されており、

学習によって人間がどのようにして漸進的に進歩し得るかを、よく示している。運転免許は、信号や交通規則の知識と、モーターを動かし速度を変える仕方の技量という、「様々の知識」を獲得したことを証明する。これらの獲得物は、それぞれの成長の段階に呼応する。

2)、人間形成は、新しい可能性を生む。

運転免許は、移動のための人間の自立をもたらすが、また運転手や運送業者としての職業活動を可能にする。人間の養成は、新しいもののその場での実現か、それとも後の活動のための出発点を作り出すことである。

3)、成長は学習に呼応する。

成長は、色々なものを手に入れること、色々な学習をすることに呼応する。学習は進歩の鍵である。授業に出席し、通信講座に加入するのは、第 1 段階であり、資料を貰っても、分類するだけだったら、進歩の面では何も起らない。進歩するためには、与えられた知識を自分のものとして消化し、原資料に働きかけて、その知識を更新しなければならない。読書の際にも、情報を心に留めて、そこから何かを学ぶには、知識の解説、理解および再組織という作業が必要であり、その手続きの全体が学習の手続きに外ならない。学ぶとは成長を獲得することであり、成長とはもろもろの段階を乗り越えることである。学習によってのみ、問題の解き方を改善し、個人的次元でも職業的次元でも進歩することが出来る¹³⁾。

4)、アンケートの続き。ノートを取ることに。

前課題のアンケートでは、学ぶという事実が奈辺にあるかを知るべき情報を集めた。ここでは、学習することが何の役に立つかが示される。

(演習題 2. 1) 学んだことが何の役に立ったか、周りの人に尋ねること。その時間いかけた人と一諸に或る学習をして、それが何の役に立ったかを一諸に見る。外国語や自動車操縦や道路地図の見方等について。

(演習題 2. 2) 試験にパスしたり、ある職業上の仕事を実行するために、どんな学習

をするものか、誰かに尋ねる。

(演習題 2. 3) この問いを自分に向けよ。

そして以上三問への答えを出来るだけ多く集める。答えの記入の仕方としては、相手が話している間にノートをとるのだが、一度会話を切るのもよい。

(演習題 2. 4) 上記題 (2. 1) と (2. 2) での対話に関わるノートの中で、次の検査をする。——問題になっているのは、「事実」か、事実間の「関係」か、それとも事実の「意味」か。

この作業を通して、ノートをとることが大事だということを理解する。なぜならノートを読み返えすと、話に出たことや読んだことの「本質を再発見する」のが容易になるからである。ノート取りは、学習の重要なテクニックである。それは記憶を容易にする。最初の整理こそ、結果の再発見を容易にする。講義であれ読書であれ展覧会であれ、ノートを取り、その整理の仕方を色々試してみることがすすめられる。

(演習題 2. 5) ノート取りに、友達がどんな取り組み方をしているか、観察すること。ノートを取って、どうするか。後で利用することが出来るか。もっと役立たせるには、どのように組織したらよいか。自分のやり方を改善することが出来るのは、これらの問いにどう答えるかにかかっている。

5)、留意点。

(演習題 2. 6) 「学ぶことは、進歩すること、諸ステップを越えることを可能にする」ことであるのを、心に深く留めること。学習が重要なのは、そのためである。

6)、実施点。

(実践題 2) いま学んでいることについて、何故、何のために、学んでいるのかと問いつめて、自分の学び方を明確にする。

【課題 3】 第 3 テーマ：学習への取り組み方

1)、アンケートの続行。

質問を自分に向けて、自身の学習の仕方を記

述して、その改善の工夫を試みる。スポーツ選手の記録の向上を図る場合、ビデオに取って、競技中の自分の反応の仕方を確かめさせる。自分のやり方を、自身批判するように求めるわけであるが、専門家はどこが良くて、どこがまずいかに気づかせる。更に他の選手を競技場やビデオで観察した上で、他人に尋ね、自分に問う。仲間たちがそれぞれの学び方について語るところと比較して、自分のやり方を分析することが出来よう。こうして自分に取って効果的なやり方を想定して、試してみることが出来るようになる。これはかなり長い間自分を占領してしまう仕事であるが、何度も取り上げ直す価値のある仕事である。

2)、自分の学習の仕方を観察する。

「読み、討議し、試みる」。学ぶために為すべき課題は、これである。¹⁴⁾ 教師が生徒たちに奨める方法は、聞き、写し、練習し、読むことである。選んだ事情や課せられた事情の中で、ある課題をやり遂げることによって、学ぶのである。課題の期間や物質的整備、仕事の社会的組織や心理的風土、更には教師の存否など、学習状況の問題点が検討されるであろう。

3)、自分が何を学ぶかを観察する。

課題とは、様々の段階を乗り越えるために作られる。課題を達成するためにも乗り越えるべき多くの段階があり、それは目標と呼ばれる。

学習の仕方を学ぶには、幾つかの段階が必要である。今この節を読む際の第一の目標は、学習のために何をするかをはっきりと文字にすることである。次に必要なのは、自分自身のやり方を組み立てるという別の目標と、そのために自分がすることを他人の仕方と比較するというもう一つの目標である。試験問題の解法を指導する場合、相当数の事実を教えた上で、この情報の利用の仕方を教えるのであり、次々に一連の目標に達しさせるのである。

何を学びつつあるかを観察することは、追

求する目標がどんなものかを発見することである。

4)、学習するための取組み方。

めざす目標と、それを実現するための課題や、それを取りまく事情という、利用すべき状況とを、明確に記述することが、問題を明らかにすることである。今、自身の学び方を描き出すことが出来るよう、自分を鍛える必要がある。

(演習題3. 1) 友達へのアンケートの結果をもう一度取り上げて、彼らがおかれた状況と彼らが目指した一連の目標群とを究明して、彼らが利用した課題と事情の一覧表を作ること。

(演習題3. 2) 行ったばかりの学習での取組み方を書きとめること。そうしたら、望むことをし、必要な状況を選べる場合があり、事例もあることが分る。多くの場合なすべきことを指示するのは、教師や学習指導者であるけれども、その場合でさえ、自分に対する期待に応えるためには、それ以上の何かをする必要を痛感するものである。何度も読み返し、レジュメを作り、仲間と討論するよう、言われなかったとしても、その欲求を感じずる自分を発見するのである。

(演習題3. 3) 学習への取組みを描き出せば、満足できる場合もあれば、そうでない場合も少なくない。それぞれの場合、自分がしたことと自分が利用した状況とを比較してみる。満足できる場合、自分は何をし、どんな事情の下でそれをしたか。満足できない場合は如何。比較せよ。

(演習題3. 4) 学習のために普段利用する状況のリストを作ってみる。ある場合、同じように利用することが出来たはずの別の状況を、付け加える。

5)、アンケートの続き：比較すること。

(演習題3. 5) 集まった証言の中から出て来る問題があることを理解するために、証言同士を比較すると共に、自身の体験談と比較すること。——両者は、どんな課題から出発し、どれくらい続き、どのように定着して

行くか。

——どのような目標を通してなら、両者は同じ結果に到達することが出来るか。

——最善の結果に到達させるのは、どんな課題か。

6)、留意点。

(演習題3. 6) 学習するためには、課題の達成を可能にする状況が設定される。課題は目標に適応させられるべきものであるから、到達すべきその結果は、自分自身のためになるように言い直して、記憶すること。

したいことを、うまく行った場合と難しかった場合とで比較して、課題の構成や選択を一層よく行うことが出来よう。

7)、ギター学習への取組み方を尋ねられた人の証言例をひとつ。

少時から15、6年もジャズやロックンロールを聞いて、エルビスのように引くのが一生の夢。13、4年も関連のあらゆる本を読み、ロックの起源を知るために、ブルースやジャズのカセットをしこたま聞いた。何でも覚え、英語も習い始めた。父が嫌っていたので、自室の鏡の前で歌い踊り、ギターの中古を買って、ビートルズの伴奏を念願し、和音の理論書も買った。

始めの中、「ギターを学ぶ」とはどういうことか知らず、カセットから歌を空で覚えた。どの部分も、何度も始めからやり直した。少しづつ耳で判読できるようになり、伴奏を覚えたら、全部歌えるようになった。楽譜が読めなくて、どうしてよいか分らなくなった時でさえ、自分に満足だった。

段々仲間と一諸に演奏し始め、彼らを見つめて多くのことを学んだ。何度も聞いたおかげで、耳で誰かの伴奏ができる迄になった。しかし聴衆の前で演奏して認めて貰いたかったので、二人のイギリス人と一寸したコンサートを催した。

学習に終りはなかった。始めは全部自分一人でやり遂げるつもりだったが、指導し助言し楽譜を読めるようにしてくれる誰かが必要だったと言うことが、今はよく分る。技術的

には未だ能力が低いけれども、自分の技量を少しは友達に伝えられたらすてきだと思っている、と。

青年が自分に与えた課題、事情、一連の目標を、この話の中から探し出すこと¹⁵⁾。

8)、実施点

(実践題3. 1) 色々の証言を自分で、言葉通りの姿で集め、学習の起源に何があり、学習がどのように展開されたかを、目標と状況(課題+事情)の語でもって分析すること。

(実践題3. 2) 現在の学習で、自分が利用し、自分に一番役立つ状況とはどんなものか、と自分に問い、新しい独創的な状況を発明し、試行してみること。

〔課題4〕 第4テーマ：自分自身を見る見方

1)、なぜ学ぶか。

学習とは進歩のため、新しい可能性の獲得のため、幾つかの段階を踏み越えて行くことである。だが何故ひとは、進歩し、新しい世界を拓くことを願い、階段を登ろうと努めるのか。人はみな自分の中に、「実現すべき自己自身」という観念を持ち運んでいると、ベルボームは示唆する。後になって自分が何になり、何をするかを思い描くのである。しかし将来どんな活動をするようになるにせよ、その活動に成功する自分を予想することが出来るのは、何かを学んでいる時だけである。あらゆる企画、あらゆる意図は、学習という長期の活動を想定している。

多くの問題の解き方を知っていると、強く巧みな何者かになろうとする等のイメージの実現を求めて、学ぼうとする。また近い将来の活動計画を実行するために学ぶ。自己点検事項に満足のゆく答えが出来たり、あるタイプの問題や方程式を解いたり、楽器を奏し模型を作るなどの短期プロジェクトのために、学ぶ。しかしかようなプロジェクトも、自分は自分の中に何か実現すべきもののかかえているのだという内感から来ていると言える。自分の中に持ち運ぶ自己自身というイメ

ージと、その実現意志こそ、学習の真の出発点であろうと見られる。¹⁶⁾

2)、自分は何者でありたいのか、また何をしたいのか。

我々は常に何ものかを目指して学ぶ。学ぶのは、家庭や企業や社会の中で何か新しいことをし、別の何者かになりたいためである。自分は何をし、何になりたいか、この目標が我々に学習理由を与える。柔道の黒帯や救急隊員、自動車や新機械の操縦といった理想が、真に学習を動機づける。学習が自分をどこに導くかを見て、真にそのことに身を捧げるのである。学校での学習、代数の学習、地理や歴史の学習がどこに連れて行くかは必ずしも明らかではなく、進級や進学と並んで、計画遂行や自己実現に、何らかの形で近づくことであろう。

3)、企画の構築。

計画を持つ時、よく学ぶが、更に重要なことは、特に短期の計画の場合、その計画に専念するようになることである。長期の計画では、親や友達や同僚が、自分たちの計画をどのようにして自分たち自身のために立てるに至ったかを、知ろうと努めることが、前課題から始めた学習アンケートに付け加えるべき重要な設問となろう。即ち、ある学習の始源はどのようなものか。この学習が対応するのは、どのような計画か、などを問うことである。

どうして、そのような企てをもったか。コンピュータが家にあるのに知らないままではと言うのが、その学習の理由であったり、友達と一諸に楽しめるものなら、ウィンドサーフィンを知りたくなったりする。様々な企画を示唆するのは、多くの場合環境だと言えよう。何かしているのを見ると誘惑される、直ぐにも同じようなことが出来るようになりたい。あらゆる誘惑の只中で正しい選択をするためには、自己自身に関する認識が重要である。

(演習題4. 1) 自分への発問——自分の趣味は？ 自分は何に感じ易いか。外的活動

を好むか。一人が好きか、社会的やりとりが好きか。物体に働きかけるのと、会合を組織するのと、どちらがよいか。等々。

(演習題 4. 2) 自分が計画する活動を実行していると想像して、自分のしている事を記せ。自分はこの状況をどう感じるか。それが楽しいイメージなら、それを心に生き生きと思い浮かべるがよい。このイメージこそ、学習のさなか困難に出会っても、どこまでも止めさせない助けとして働く。計画を表現し、且つ持続させるものは、このイメージである¹⁷⁾。

4)、活動するためのイメージ。

課題達成のためには、何をなすべきかをありありと思い描き、その映像を自分のものにすることが大切である。安らかに、しかもしなやかに、障害に取り組む自分を想像することの重要性。自分自身に関するイメージの発展は、目的遂行活動をしなやかにする。

(演習題 4. 3) 自分がどんな者になろうとしているかのイメージを、徐々に築き上げること。そうすれば、このイメージの実現手段を手に入れることになる。学習が終わったら、どんな人になりたいか。そのためには、何が出来るようになりたいか。

5)、留意点。

(演習題 4. 4) 自分が行動し学習するのは、自分自身のイメージとの関係を通してであることを、深く心に刻むこと。

6)、実施点。

(実践題 4. 1) 自分が出来るようになりたいと思う活動を実行している人びとが、何をしているか、照合すること。このイメージを大事にとっておいて、何度も見直すこと。

(実践題 4. 2) 読んだこと、聞いたこと、考えたことについて、心的イメージを作り上げるように、自分を訓練すること。毎日、努めよ。

〔課題 5〕 第 5 テーマ：自分の学習 企画

1)、アンケートから活動へ。

様々な職種に就くことが出来るようになるための職業計画と、様々な活動に従事することが出来るようになるための活動計画。その実施のためには、学習計画が要る。

学ぶためには、読む・実験する・討議するなど課題を実行する状況を設定するが、それはやがて学習計画へと進歩し発展して行く。アンケートの示す所では、計画の実施は、相次ぐ目標を達成することである。学習は、計画を持つ場合、特に成功する。そこで学習計画を組立てる目標と状況とを設定する訓練を、自分に課することが大事になる。ギターを引けるようになるには、音符や指の位置を見分けるという目標を実現するための課題を実施できる状況を作り出す能力が必要である。学習計画＝目標＋状況（課題と事情）という図式が作られる¹⁸⁾ことになるであろう。

2)、様々な目標の全体としての企画。

学習計画は、最後には何を知り、何をする事が出来るようになりたいか、から出発する。即ち、行動計画や職業計画の指導下にあるということである。従って学習計画の第 1 段は、目標が何に対応しているのかが正確に分るように、目標を明瞭に述べることである。どういう能力を修得するのが問題かが分っていたら、一層早く、一層よく学ぶであろう。何が出来るようになりたいか、正確に言い表わすには、自分にも問い、教師にも問わねばならない。しかし問いを置くとはい、既に目標を定めることであり、これこそ学習成功の秘密の一つなのである。

第 2 ステップは、最終目標から媒介的中間目標に移ることである。学ぶとは障害を克服することであり、障害は段々と越えて行くべき中間的部分目標を形作る。しかしそれを乗り越えることが出来るのは、それをよりよく識別して命名するに至った時だけであり、これこそ学習の鍵であろう¹⁹⁾。

3)、直面する状況の継起としての企画。

プロジェクトとは、様々な課題の全体を言う。目標が自分のものである限りは、それに達すべき手段や方法を工夫しないわけには行

かない。目標を達成するには、自分で聴き、自分で読み、自分で観察し、みずから試み、みずから発問するであろう。それこそ自分に与える課題であって、課題は学習状況に対応する。どうしたらよいか自問する時、友達がどうするかを観察するが、そのとき観察という課題を自分に与えるのである。そしてその課題がどんな事情のもとで為さるべきかと自問して、状況を設定する²⁰⁾。

4)、職業計画や活動計画の手段としての学習計画

学習計画とは、全体目標と部分目標、及びそれに達するための仕方としての手続きから成る。それは職業計画や活動計画の結果として、そこから出て来る。職業計画は、自分自身について作っている観念、自分自身への想いに依存する。役者や指物師や写真家になるには、これら職業人の為すべきことを学ばねばならない。公認会計士は、来客に、事業の活動開始に当ってどんな法律機構を採用するかについて、助言する能力が要る。公認会計士になりたければ、多様な企業形態を区別することが出来るような学習計画を立てねばならない。試験に備える学習計画は、何次方程式が解けるようになることであろう。この最終計画のために、中間目標群と一連の状況群を設定するのである。

5)、演習問題群

目標や状況は、第6と第7の課題で取り上げるので、ここでは職業計画や活動計画に呼応する全体的学習計画を定めたい。

(職業計画) (学習計画)

公認会計士

その仕事：	○就中、法律上の助
○法律上の助言	言を与えることが
○企業組織の助言	出来ること
○会計組織	○会計を管理するこ
○会計管理	とが出来ること
.....○.....○.....

(活動計画) (学習計画)

棚板の下に引出	○引出しの固定の仕方
しをつける	

○引出しの作り方を知る

○棚板に溝を掘る

○最後の組立て方を知る

(演習題5. 1) 職業計画の一つを選んで、学習計画のどんな活動や作業に対応するかを探究すること。

(演習題5. 2) 実現をめざす活動計画で、その実現のための力量がどんなものを、決める。

(演習題5. 3) 実際に受けている教育の中では、何らかの技量を学びとることが求められている。させられる学習の中の一つを選んで、どんな生存計画や作業計画に結びつくものか、見よ。

6)、留意点。計画に着手すること。

学習計画をもつ場合にしか、本当には学習しない。学習計画は、自分が何になり、何をしようとするかの決意に貫かれる。その瞬間、必要な達成状況の中に置かれることが出来る。真に学ぶためには、即ち適切な状況を探り出すには、計画を持たねばならない²¹⁾。

(演習題5. 4) いま思い出す確認事項を、自分のためになるように言い表わし、その文面を記憶すること。

7)、実施点

図式は、データや事実間の関係を示す。事実の相互関連を矢で表わす図式を作り、自分が見出される諸事情の中で関係図式を作ると言う訓練を、自ら行うことが望ましい。

(実践題5. 1) いま受けている教育の枠内で、自分の包括的目標達成のための部分的目標群の継起の順序を示す図式を作ること。

(実践題5. 2) 部分目標ごとに、必要な状況を対応させること。

上来の学び方の学習を通して、自分の学び方が変化するのが確認されるだろう。自分のやり方を問うてみて、それがどこへ導くかを見る。この作業を続けて、一段階が終るごとに各段階の留意点を読み返し、実践題をやり直すこと。

学習のイニシアティブを自分がとらない時は、目標群が相次いで与えられるであろう。

しかし課せられる目標に達するための中間目標は、やはり自分が自分に課するものである。

【課題 6】 第 6 テーマ：学習目標の
記述

目標を達成したか否かを知るには、その目標をはっきりした文章にしておかなくてはならない。目標はよく選んで、手頃で十分実現可能なものでなくてはならない。部分目標は、全体目標に進んで行けるものである必要がある。さて今や実践に移行して、自分にとって〈良い〉学習目標を立てるのを学ぶべき時である。

1)、目標記述。

何を学びたいかを言い表わす際大切なことは、何が問題なのかを正確に知ることである。そのためには、目標の叙述が三つの部分を含む必要がある。

①、目標に対応する行動の記述：ある練習問題が解ける、ある認識問題に答えられるとか、機械の修理、道具の使用、信号の列記など。

②、この行動の実施条件：資料の利用、一定時間内の行動、特定の場所、一人でか集団でか、あるいは助力の有無。

③、行動の達成や、行動の必要な条件や性質などを確認するための判定基準。

このような記述は、実験的に証明できる所の「観察できる行動」の場合にしか、可能ではない。このような三つの部分を含む目標記述例。

——英字新聞の論説の根本理念をとり上げ(判定基準)、正確な英語で、辞引きも助けもなしに(条件)、口頭でその要旨を述べる(行動) ことが出来る。

——決まった時間内にウインドサーフィンから落ちずに(基準)、強度 4 の風速の下で(条件)、指定されたブイまで水走する(行動) ことができる。

——一人で短時間内に(条件)、正確な答を見つけて(基準)、数学の問題に出て来る一次方程式を解く(行動) ことが出来る。

これらの指示を尊重するならば、学習はど

ういう時点で終わると見てよいか、誰でも正確に知ることが出来よう²²⁾。

2)、行動の追求。

ギターを引き、デッサンをすることが出来ると言う意味は、必ずしもはっきりしない。どんなことが出来るか、もっと明確な仕方で記述する必要がある。英語の不規則動詞の種類を空で言うとか、これこれの問いに答えることが出来ると言った、はっきり限定された行動が必要である。そのため、しかじかの定義をする、ある規則を思い出すと言うような、明確な問題の提起が望ましい。その問題を未だ知らない時は、その内容を想像し、そこで期待されている行動を生み出すことが出来るよう、自分を準備しなくてはならない。それは困難だが、まさしく為なければならないことである。

学校教育の場で生徒の立てる学習目標は、教師が期待している行動である。期待するのは何かと教師に問い、それはどういうことかと想像することが、生徒の役目である。授業を学ぶ時の目標を聞かれた生徒たちの答は、授業を理解したとき学んだと思う、と言うものであった。理解とはどんな行動に対応するかと問われた時、定義や定理を繰り返して言うことが出来るとの答もあれば、授業のとき解いた問題をもう一度解くことが出来るとの答や、授業で習っていない問題を解くことが出来るとの答もあった。

理解するとは、多くの違った活動に当てはまる語であって、明確に観察できる行動を言い表わす語にはなっていない。デッサンが出来ると言う場合も、教科書の手本の写しが出来ることか、自然を直接素描することか、それとも想像で描くことか、明らかではない。

(演習題 6. 1) 学習目標に対応する行動の記述の仕方を、練習すること。

観察できる行動の種類として挙げられているのは、記述する、表現する、比較する、分類する、定義する、解決する等であったり、構築する、命中する、置き代える等であったりする。このリストを完成させること²³⁾。

3)、行動の実施条件。

行動は一つの物である。この行動の成就する条件は大事な仕上げを意味するのに、当然のこととしてしばしば無視されるのである。問題を解く、デッサンや手工の練習ををすると言う時、どれだけの時間を使うかを言明することは、概して忘れられる。どんな物質的な助けを借りる必要があるかも、はっきりしない。明確にすべき条件は、時間（持続期間と特定時刻）、設備や施設、社会的組織（一人かグループか、助けがあるか）に関わる。条件は、実施すべき行動を一層よく位置づけるであろう。

（演習題 6. 2）前題（6. 1）の実例で、条件に関する指示を付け加えること。

4)、達成の判定基準。

目標の十分な記述のためには、それが如何なる時点で達せられたと判断されるかの明示が、必要である。成功の基準と呼ばれるもので、1) の例で言うとは基準は、「本質的観念」、「所定の時間」、そして「良い」答えである。この基準はいわば、成功を失敗から区別することを可能にする条件群であって、「良いかどうか」を言うことが出来るようにする比較の要因である。

（演習題 6. 3）普通この基準は、当り前のこととして、明確にされない。平均的な結果を望むからであるが、よりよい結果を望むことも出来る。自分の目標には何を求めるか。実現の基準を示すこと。

5)、最終目標と中間目標。

目標達成までの諸段階が、中間目標に相当する。学習を望む場合の問題点は、どんなステップを踏んで行くかを知ることである。最終目標を明確にすることが出来ても、通過すべき段階を明記することは、一層困難である。目標の追求のためにはどんな中間的学習が必要かを、順を追って発見して行くのであるが、どんな中間目標がよいか分かるのは概して教師であって、この中間目標群が教授プログラムを構成するのである。しかしどんな中間目標を通過すべきかを決定するのは、究極目

標設定の権利を握っている学習者自身である²⁴⁾。

（演習題 6. 4）自分の学習計画を作り直すよう努めること。どんなステップ、どんな中間目標が、自分には必要かを明確にすること。ある段階は十分なものだったか。その段階を前以て予見することが出来たか。それらの段階を順を追って発見して行ったか。

6)、留意点。

（演習題 6. 5）学習の終りに何が出来るようになりたいかを表現し、実現条件と成功基準を明確に示す目標を立てること。そして、通過することが大事なステップや中間目標を、自分に差し向けること。

以上のことを実例によって明らかにした後、それを空で繰り返すこと。十分な学習のためには、このことは大切である。

目標を持つことは、学習意志を発展させるのに貢献する。

7)、実施点。

（実践題 6. 1）過去の学習で立てた目標は、どんなものだったか。それを今、どのように明示することが出来るか。

（実践題 6. 2）今この学習での目標と中間目標とを、どのように表現するか。その学習の仕方が発展するためには、与えられた助言を繰り返し実践に移すべきである。

このテーマはいささか困難だから、再読して要点に下線せよ。

【課題 7】 第 7 テーマ：可能な状況と手続き

学習企画は、目標とその実現を助ける状況との記述から成る。前課題で目標の記述を扱ったので、ここではどのような学習状況がありうるかを明らかにすると同時に、実際の学習に対して有益な状況を理解するのを、漸次助けて行きたいと考える。

1)、学ぶには、何をしたらよいか。

問題は、読み、聞き、真似し、反省し、実験すると言った、学習のために必要な作業で以て行う場合の課題である。

(演習題 7. 1) 何かを学ぶことが出来るような、可能な全課題を、詳しく調査すること。課題として頭の中に浮んで来るすべてのことを記した上で、自分に適した仕方で分類すること。その分類の基準を明示する努力をすること。

しかし学ぶために為すべきことを明らかにするには、単に課題の性質について示すだけでなく、その課題がどんな事情の中で展開されねばならないかを明らかにすることが、同じく重要である。学ぶための状況は、課題と事情とで以て記述することが出来る。

(演習題 7. 2) 学習状況とは何かを明らかにするには、どんな事情のことを考えたらよいか。更に自分が何について考えているかを記述することが出来るようになること。課題遂行の期間という時間問題は、状況の特徴づけの仕方の一つである。学習状況の性格づけのために、どんな事情のことを考えているか、に気付くこと。自分が気付いたことを、次頁の(演習題 7. 2 への答)の形で、他の提案と比較すること。

どんな課題を達成することが大切か、そしてそのことはどんな事情の下で起るか、——即ち主として課題の持続期間、対応する物質的設備、一人でか集団でか、能力ある人がいるか否か等の事実を示して、学習状況を記述する手掛りを与える。特にある状況が、それだけで孤立して現われることはない。学習は諸状況の継起を通して行われるので、この継起ないしは手続きが重要なのである。例えば 1 時間読んで、30 分レジュメを作り、それ以上情報を求めず、次に読んで理解したことをしようとして実験し、その報告を作り、記憶する等。

(演習題 7. 3) 最近の学習のために必要とした諸状況の継起を、再構成してみること。思い浮かぶ学習活動に即して言うと、継起の順序は同じではないことが分る。ある場合には読むことから始めているが、別の場合は試みや実験から始めている。友達と話し合ってみると、同じ内容の学習でも、各自で違った

振舞いをしていることが分かる。そこから、自分の学び方を見直すのに合った見方が出て来るだろう。

2)、学ぶには、どうしたらよいか。

学習のための様々な活動が相次いで現われるそれぞれの状況において、データを把握し・変形し・再利用し・記憶するという心的活動が起こる。データを把握する場合、見・聞・触・試に努めるが、データを自分の意向に沿って把握するための手段も色々ある。データに磨きをかけて、役に立つように構成し直すやり方もまた色々ある。合理的な仕方では、情報を分析して部分的情報に分解し、その一つ一つを検討して、新しい関係づけを考え出し、全体を再構成する。直観的な取組みでは、反対に情報を全体として把え、全体として思い出されるものを探ろうとする。前者では、一要素から他要素へと観察を進め、各部分が表わすものを探究するので、合理的分析的な仕方では画面を見る。後者では、画面を全体として眺め、その意味や言おうとするところを、一気に把握しようとする。問題の表現も作文の表現と同様、どちらの仕方でも理解することが出来る。

(演習題 7. 4) 問題の文面を分析的な仕方では読む一方、それについての全体的な説明を行うこと。そして自分が二つの読み方を行ったことを確かめること。

こういう練習をしたら、この二つの仕方が多分補い合うものであることが確かめられよう。丁度、ある事の視覚的データと聴覚的データが相互に補足的であるように。データの記憶の場合でも、違った仕方では取組むことが出来る。データを理解するとは、それを自分自身の仕方では言い換えることであるから、〈頭で〉学ぶことも出来るが、また〈心で〉学ぶことも出来る、つまり言葉のリズムやハーモニーを覚えることが出来るのである。また運動を言葉や観念に結びつけ、特にこの運動を記憶する、つまり〈体で〉学ぶことが出来る。ある役柄や暗誦文を学ぶ場合、これら三つのやり方のどれかで、或いは三つとも一諸に同

時に取組むことも出来る。何を記憶しようとしているかを理解することは、頭で学ぶことである。感情の次元でも表現された観念の次元でも同じく響きのよいリズムを心に刻もうとすることは、心で学ぶことであり、それに運動を結びつけようとすることは、体で学ぶことである²⁵⁾。

(演習題 7. 5) 自分が色々な課題をどのように達成したかを明らかにして、状況の継起という形で、学習の手続きを記述すること。

3)、漸進法で学ぶ。

学ぶためには、様々の違った状況に訴えざるを得ないという事情が、人間は漸進的にしか学ばないということを教えている。学習主題を本当に把握するには、繰り返し主題に立ち返らねばならない。完全習得をめざして、知識と共に行動を改善するため、新しい局面を少しずつ発見して行く。学習にとって重要なことは、何を何時修得するかという選択を第一歩とする。習得の対象としての知識や行動の構造を解明する努力が、第二歩である。研究者の一致した見解によれば、習得に要する時間は数百時間にも及ぶ。学習するためには、できるだけ多様な状況を設定し、これらの状況をできるだけ完全に開発することが大切である。

4)、留意点。

(演習題 7. 6) 次のような結論を、図式の形で表示して、記憶すること。

自分の学び方を記述するには、状況を性格づける課題と事情を示すことを通して、目ざす行動を生み出すことが出来る状況を記述するのがよい。

それぞれの状況においては、視、聴覚ないし運動上のデータを把握し、データを分析して、教科書や報告書の文言を全体として把握するのに努める。理解、リズムおよび運動を通して、記憶することが出来る²⁶⁾。

5)、実施点。

(実践題 7. 1) 次の新しい設問を付け加えて、いま体験してる学習の認識を深めること。

学習を可能にする状況とは、どんなものか。

その状況は、どんな課題や事情に対応するか。

(実践題 7. 2) ある場合の学習で、自分にとって最も効果的な状況とは、どんなものか。

(演習題 7. 1 への答) 複合課題ないし諸課題の全体として(一人でかグループでか): 旅行する、展覧会へ行く、展覧会を準備する、報告書を作成する、記録を整理する、問題を解く、書類を作成する、覚書をしたためる、命令によって課題を成し遂げる。

初級課題 (一人でかグループでか): 読み、聞き、観察、質問、模倣、試行、実験、討議、編集、反省、記憶。

(演習題 7. 2 への答) 事情のうち留意できるのは、持続期間、日付け、物質的設備、グループの組織か非組織、能力ある人物の現存か不在、愛想がよいか心配な心理的風土。

【課題 8】 第 8 テーマ: 過去の成功。

自分が学んだことのすべて。

これまでして来た演習のすべては、自分が既に多くのことを知っているのを教える。色々な仕方も学んだ。これまでの学習で得られた多様な知識と技量は、自分の学習能力の証拠であって、更なる学習の成功に自信を持っていい理由として、その再認識に努めるのが望ましい。

1)、最小の行動でも多数の知識を前提する。

自分が為し得るすべてを確認する要がある。読むことは、辞引きが要としても、既に多くの知識を持っている証拠である。高校生なら約3000語。電話するのには、番号の仕組み、数字の順序、相手の番号、番号検索の手続き、電話帳の見方を知っている要がある。

(演習題 8. 1) スポーツや故障の修理や緊張緩和などについての知識のリストを作ること。それが何を表わすかが全部分ったら、確かに仰天する。身体活動、精神活動、室内活動、野外活動、芸術活動、職業活動、余暇活動などの諸活動を整理して、その分類基準

を示すこと。

2)、最小の行動でも多くの学習を前提する。

我々は既に多くのことを学んだ。有用な情報の記憶、多様な力量の獲得。少しずつ進歩して来たのは、提案の演習題をこなして来たからだ。

(演習題 8. 2) 特定分野での成果を達成するために行った演習題を記すこと。

3)、どの学習も、一つの活動と一つの自信とを前提とする。

これまでの学習は、行動に当たって、学習者の側からの一つの約束を必要とした。読書、観察、実験、反省などの活動が有用だと考えなかったら、これらの活動は行われなかった筈だ。しかしその活動に身を投げ入れることによって、その活動から、進歩するための何事かを引き出すことが出来た。自分を信頼したからこそ、これらの演習をやり遂げることを承知した筈である。

成果の見込みがあると思った時、活動に身を投ずるものである。ダメではないかと、〈予め打ちのめされて出発する〉時には、満足な結果は得られない。無意識の裡に自分の全エネルギーを動員しないと言うだけで、自分の使える全手段が動員できないのである。学習成功の重要条件は、自分に対する信頼である。成功すると自己評価する時、まさしく成功する。

(演習題 8. 3) 何か新しい学習を始めようとする時、成功した際の自分への信頼を思い出すか。成否と、自信の存否とを関係づけることが出来るか。困難に出会った時、本当に自分の全エネルギーを発動させたかどうか、自分はその困難を本当に克服できると評価したかどうか、想起すること²⁷⁾。

4)、自分に対する信頼はどこから来るか。

(演習題 8. 4) 次の学習に成功できると思うかどうか。

一次方程式を解く。自分の水準の教科書を理解する。帆船を操縦する。岩壁をよじ登る。

また自分が出来ると思う理由、出来ないと思う理由を、演習帳で答えること。

自分の可能性を知っているのは、多分、既に何か似たことをしたからだ、或いはただ単にそれが楽しいからだ、またはうまくやってみたいからだ、と答えるだろう。そしてそのことは又、この自分に対する他人の信用、この自分に関する他人の判断から来るのである。

自信は、過去の成功に由来する。既に多くのことを学んだから、自信が持てるのである。前学習の効果で新学習に備えることが、自信を強化するのである。ゲレンデに飛び出す前に、スキーの本を読んでおけば、状況の新鮮さにそれほど惑わされなくて済むだろう。〈知識の豊かな人は、二人分の価値がある²⁸⁾〉。

5)、学習を成功させるには、自己信頼を発展させること。

自分には成功すべきあらゆる理由があると確信して、学習に取り組むことが大切である。過去の成功、自分が知っていることの全部、従ってまた自分が学ぶことの出来るすべてのことを考えること。単に過去を再考するだけでなく、来るべき学習に備えることによって、自信を発展させることが出来る。そのためには、企てている学習に関して情報を集める必要がある。自分より進んでいる周りの人びとに尋ねて、学習内容と同じく学習方法についての情報を集めること。他人からの提案に驚かず、一層自信を持てるようになるだろう。

6)、留意点。

(演習題 8. 5) 今の学習に近い分野での過去の成功を評価すること。そのことを何度も考え直すこと。過去を確かめ、新しいことに取り組むのに備えることが多少長くなっても、意気阻喪しないこと。誰にとっても事は同じであり、成功は道の果てにある。

7)、実施点。

(実践題 8. 1) この章の重要点に下線すること。その場合でなくとも、それをする事。

(実践題 8. 2) 学習に関するアンケートの際、始めに自信を持っていたかどうか尋ねること。その答を、実際の成果と比較すること。

〔課題 9〕 第 9 テーマ：予想される
学習手続きの記述：一つ
の学習を組織すること。

第 1 テーマ以来、仲間や同僚が如何に学ぶかを知るためのアンケートを繰返して来た。次に自分の目標やそのための状況とは何かを探究して、自分の学習を分析することを学んだ。また目標の表わし方と学習状況のあり方を示した。今度はこれらの知識を活用して、学習を組織して、目標達成の方策を予見することである。

1)、〈直ぐに成功すると確信しているか。〉

前課題では、学習遂行における自信の重要性を示した。目標が困難であるほど自分を信頼して、達成可能であると自己評価しなくてはならない。学習を組織する前に、主たる段階と不測の困難について十分情報を得ておくならば、熱情をもってそれに飛び込むことが出来よう。

2)、〈達成したい成果とはどんなものか。〉

〔課題 6〕で扱った目標論を読み直しておいて、目標例を取上げ、「学習の終わりに、…できるようになる」という書式で記述し、その目標のための行動と、その条件としての継続期間と物質的条件とを明確にしておき、最終結果と中間目標との関係を定めること。その目標論の要旨を、2 分以内に、削除なしで、適切な順序で組立て直すことが出来るのが望ましい。

学習手続きを概念化する場合の困難の一つは、目標までの段階の決定である。その段階は各自にとって同じではないからである。

(演習題 9. 1) 目標達成の作業計画を作成し、友達や教師とその組織の仕方について討議すること。最終目標同様、部分目標も、その実現条件と達成された姿とを指示して、定義する配慮をすること。学習の組織の仕方が進歩するのはこの種の演習を通してであるから、幾つかの実例についてそれを行うこと。

3)、目標に至るまでに通過すべき状況。

〔課題 7〕での指示を見直して、本質的な

ものを要約するような一つの画面を作り出すこと。

選ぶべき状況とは、必要性が自分で感じられる状況である。差し当っての問題は、目標達成に必要な状況を予見することである。ある学科でのレジメを記憶するには、そのレジメを先ず自ら作ることから始める必要がある。そしてレジメ（要約）することは、読むとプランを作るという課題の後に来る課題である。それらの状況がどう展開するかを予見するには、どれだけの時間を使い、どんな時にその状況を実現し、どんな材料が必要か、どんな人達と一諸に勉強しようとするか、明らかにしなくてはならない。それは一見こみ入って見えるが、多少の習慣があれば容易に成功し、現在の結果よりもよい結果を得させてくれる。

(演習題 9. 2) 実際の学習の必要から出発すること。順次的目標群とそのための状況群から成る企 画^{プロジェクト}を作成して、友人や教師と討議すること。自分で決めた目標の達成を確認した時に、始めて一状況から他状況へ移るころが出来ることに注意する要がある²⁹⁾。

4)、学習の組織のために為すべきこと。

相次ぐ操作の仕方をまとめ直して、そのリストでもってコントロールすることである。離陸前の航空機の機能チェックを、リストに従って一個所づつ点検するように。各事項の確認によって、忘れていたものがないことを確かめる。

(演習題 9. 3)、学習の組織化のため、質問項目のリストを確定すること。次にそのリストによる質問を実施して、答えを試みること。

ここで学習の組織のためのステップのリストに関する、ベルボームの提案を見よう。

——達すべき包括目標はどんなものか。——どんな最終行動か。——どんな条件で実行すべきか。——何時目標が達せられるか（つまり実現基準は何か）。——前以て達せらるべき部分目標群はどんなものか。各部分目標としての、最終行動、実施条件、実施基準を指

定すること。——各部分目標の達成にはどんな状況が必要か。各状況についての課題の性質や事情(日時、期間、必要用具・設備、グループかどうか、人物の現存、有能かどうか)を、明らかにする³⁰⁾。

5)、留意点。

(演習題9. 4) 学習に当って何を為すべきかのチェック・リストを確定して、記憶すること。

6)、実施点。

(実践題9. 1) 前出のリストを利用すること。

(実践題9. 2) 実施した準備作業を評定すること。どの点で、予見が実際に役立つか、そして予見はどの点まで、目標の達成を可能にするか、を見極めること。

こうして我々は真の実験に招かれているのである。その実験とは、学習状況を理解し、学習状況を作動させ、得られた結果を観察することである。例えば、うまく行かないのは、課題の性質のためか、時間が短かすぎるためか、更には道具・設備や必要な助力を自由に得られないためか等を観察することによって、少しずつやり方を改善して行くことが出来る。

【課題10】 第10テーマ：学習は既得の知識に依存する。

〔課題6、7、9〕は学習組織の仕方を教え、そのための目標記述の仕方、状況の選び方を示した。また〔課題8〕では、成功要因としての自己信頼の重要性が語られた。本課題と次課題は、学習成功の別の二条件に注意を喚起したい。即ち、先行知識と、身体的心理的形成とである。

1)、先行知識と学習。

割算の前に、引き算と足し算が出来なくては行けない。英語の勉強やその語彙の知識がなくては、英文の読解は出来ない。国語辞典や百科辞典の引き方の要。ある型の問題の解決には、より単純な問題解決を知っていないといけない。モーターバイクの修理には、電

気回路の調節技能が要る。全学習はより単純な学習に依拠し、基本的学習は学習高度化の基礎条件である。学習は新知識を旧知識に結びつけ直すことであり、未知の何かを学ぶことは、既知の何かに関わる。

既知のことが不正確だと、その見方を棄て拒けて、現実の新しい表象を作る。学ぶとき作られる現実の像は、「心的表象」と呼ばれる。何か学び、何か教えようとするなら、知っていると思っていることで正確なのは何か、どの表象を修正しなければならないか、を究明しなくてはならないが、誤った観念は廃棄が困難で、正しい観念の獲得を妨げる。

(演習題10. 1) 同じ作業を別の事例について為すこと。ある学習対象に関して、どんな変化を取り入れなければならなかったか、どんな新しい観念を採り上げねばならなかったか、に注意すること³¹⁾。

しかしどんな知識も観念もない分野では、身動きもならない。様々な分野で経験し、観察し、また周りで何が言われているかに耳を傾けることが大事である。日々の生活を形作るこれらの状況はすべて、より深化した知の出発点としての経験をもたらす。

学ぶとは息の長い仕事である。近づけては比べ、説明の仕方を思い描くことを通して、活動するために益々十分になる表象を、頭の中で漸増的に築き上げるのである。学ぶとは、環境の中で把えた情報に意味を与えることであると言われる。

(演習題10. 2) 本節1)のレジュメを作り、それをシェーマの形で示すこと。

2)、学習の前の必要な知識の集め方。

既知から新知を築き出すことがこれほど重要であるとすれば、新しい学習に必要な知識は、学習に先立って集められなくてはなるまい。何学年も前の教科書を読み返えすことを恐れるなかれ。教師は授業を始める前に、新しいデータをもたらすのに役立つ知識を思い出させようとするが、学習を助けるこういう想起に注意するがよい。新しいデータに意味を与えることが出来るのは、自分が理解する

ことの出来るこの思い出のおかげである。辞引きや百科辞典や資料センターに問い合わせるのをためらう理由はないであろう。

むろん必要な全情報の蓄積がなかったら、読解や分析作業を更に進めないと言うことではない。人はしばしば身を以て、説明や作業の仕方を発見することが出来る。しかし何時であっても、他人の経験なしで済まそうとしないことである。他人の経験は、自分の時間の得になり、必要品のムダ使いを避けさせる。作業の前でも最中でも、助言してくれて、相談したくなるような一般的著作が重要になる³²⁾。

3)、自分の学び方の分析に立ち返ること。

今や新資料を自由に使って、自分の位置を見定める試みをしよう。学習の仕方や記述は、目標群の継起と、そのために必要な状況群とを指定する形を取るが、学習に対する態度、即ち自分への信頼と、学習対象に対する関心とを付け加えよう。又その期間、時点、道具、仲間のグループや人物などの指定は、状況を明確にする。〔課題7〕で指摘したように、自分が〈心で〉も〈頭で〉も〈体で〉も覚えようとしたかどうか、問われるであろう。

(演習題10. 3) 既成知識に新しい情報を加えることに、今や興味があろう。自分が選んだ学習で必要だった先行知識に留意すること。

(演習題10. 4) その学習で、目標に対応する最終行動と、それに関して所有している知識とを関係づけること。その既有知は何の役に立ったか。今では自由に使っている知識でもって、学習の成否を説明できるか。

4)、留意点。

新しい学習との取組みの準備には、十分時間を使うことが大切である。そのためには、これから何をしようとしているのかを問い合わせると共に、これまでの数年間に獲た物を改めて見直すことによって、同じ分野で更に何を学ぶことが出来るかを、見通すことが出来よう。

(演習題10. 5) 本テーマで、心に留めた

いことを記せ。

5)、実施点。

(実践題10. 1) 今している学習を分析し直し、先行知が占めている場所に注目すること。困難に出会ったら、必要な知識でもって、その困難を理解することが出来るか。

(実践題10. 2) 学習を検討する場合、何が自分の役に立つかを見直す時間を十分にとること。

〔課題11〕 第11テーマ：自身の身体状態と心理状態

1)、調査からの出発。

友人や同僚の学び方についての証言と、自分自身の学び方の再構成とを通して、身体状態に関する情報を更に集められるか。つかれているかどうか、病気か元気か、視聴活動の困難の有無。学習作業の成果と、身体状態を関係づけるのは興味があろう。体や心理次元のあり方などで気がかりがあると、注意の集中が妨げられる。自己集中への妨害には、スキーやバカンスの場合のように、愉快的なものもあるが、クラスやグループの雰囲気は、勉学への専念を左右する。調査が重要な結果を生み出すことが期待される。

(演習題11. 1) 学習において、心身の状態が演ずる役割を明確にすること。友人がそれぞれの学習について言うことと、自分の学習について記憶で再構成できることに注意すること。

2)、身体状態の配慮。

問題や作文の反省、講義の再検討や修正は、体の調子がよい時を選ぶ。練習には時を選んで、こうして全チャンスを自分の側に取っておけば、時間をムダにしないですむだろう。一日中でも体に適した時間を選ぶために、就寝や起床に配慮するだろう。睡眠は8時間がよい。長時間の仕事を避け、酸素補給のため2時間ごとの休止を見通しておき、その時深く呼吸せよ。水、よい純粋水を飲めば、間もなく再び回復する自分を感じるのであろう。無機塩ゆたかな栄養としての生野菜、新鮮果実、

乾燥果物。神経を乱す刺激物をさける、等³³⁾。

(演習題11. 2) 習慣的な作業条件に注意すること。何時、期間、栄養。有利な条件が問題か。もっと有利な条件があるか。以上のことについて、自分として何と言えるか。

3)、心理状態の配慮。

心理状態の修正は身体状態の場合より困難だが、両者は深く結びついている。心理状態の修正が出来るのは、身体状態に働きかけることを通してである。よき眠りは、改めて人生を楽天主義に向かって開かせる。深い呼吸は、静寂をもたらし、改めて自己集中を許す。緊張緩和や感化の場合も、正しい位置をとることにある。即ち足を土の上に平らに、腕を膝か机の上に置いて、力を抜いて真直に坐ることである。頭から始めて体の各部分で、そのたび毎に筋肉のゆるみを促しながら、その各部位への自己集中に努める。その位置で目を閉じ、肺に浸透して来る空気を追って、それが再び追い出されるまで辿る試みをする事が出来る。鼻孔、気管、肺自身のレベルで、自分が感ずる印象はどんなものか。入って来る空気と出て行く空気の違いが分かる。この種の練習は2分ばかりで、仕事再開のために自分をとらえ直し、仕事に改めてより注意深く、より集中させられるようになる。このことの意味が分らなかったら、深く息をせよ³⁴⁾。

このベルボームの指摘を聞いていると、日本人ならあの「静座法」を思い出し、自由作文運動の首唱者であった芦戸恵之助がその実践者であったことに思い至るであろう。洋の東西における身心相関の思想的実践の深い接点に立ち会うのを感じるのである。我々としても、立ち帰るべきところを示唆される思いがするであろう³⁵⁾。

(演習題11. 3) 上言のように、坐ってのリラックスの練習をせよ。その練習のさ中と事後とで、自分が何を感じるか、注意すること。

4)、よりよい自己認識。

ここまで来ると、自分の学び方の観察や、学習活動の効果的組織のために、必要などん

なことでも出来るようになっている。よりよい自己認識は、よりよい学習の基底にある。成功の可能な最上のチャンスを得るために、何を考慮しなければならないのか、この自分は今や知っている筈である。――

自分と、自分を助けることが出来る人とを信頼すること。――はっきりした目標と、そこに至るための中間目標をもつこと。――必要な状況を自分に与えること。――身心の適切な状態を保ちながら、この状況の最善の利用を試みること。

学ぶため、自分に適したことに益々深く留意すること。よりよい仕事が出来、より効果的に振舞うことが出来る事情を発見すること。そのことを、それぞれの学習のために。なぜなら好都合な事情は、学習内容ごとに異なる。目標を明確にし、変る状況を活用し、継続期間や物質的事情を調整しながら、朝夕試みること³⁶⁾。

5)、留意点。

学習は、自分にとっては観察対象であり、実験対象とならなければならない。やり方の改良に努めることは、情熱をかき立てることでありうる。その仕方で、学ぶべきことを学ぶだけでなく、学ぶべき仕方をも学ぶのである。

(演習題11. 4) 本テーマの重要点を確かめ、記憶すること。

6)、実施点。

(実践題11. 1) 学ぶとき、緊張緩和や受け入れ易い状態を活用し、自分はどんな時、どんな事情において、この状態を利用したかを確かめること。

(実践題11. 2) 態度、企画、状況といった学習に関する重要なデータと親密になっておく必要がある。自分のやり方を分析すること。学習に当たっての自分の態度、計画、状況がどんなものかを見ながら、自分の学習の仕方を自覚すること。

読む時、自分にとって大事なものは何かを強調するのを忘れないこと。

〔課題12〕 第12テーマ：学習技術と
 プラン
 しての理解のための計画
 シェーマ
 と図式。

問題や説明、情報や文章に接した時、人はどうするか。恐らく細部に立ち入らず、何を自分に語りかけているかを理解しようと努めると言えよう。しかし理解するとは何か。そして理解するためには、何をするか。プランとシェーマが、その際、どういう点で自分を助けてくれるか、を見よう。

1)、一層細かいアンケート。

学ぶためにどうするかと尋ねると、そこで利用する状況に関わって、読んだり、聞いたたり、問うたりすると言う答えが返って来るが、それではそうすることで何をしようとしているかと問い返すと、大変興味のあることに、多分、理解しようとしているのだと説明されるだろう。理解するとは、こう答える人にとってはどういう意味なのか。また自分にとっては、どういうことをすることか。理解したとは、いつ言うか。

(演習第12. 1) この質問に、自分で書いて答えるまでは、この文面を読み続けな

2)、理解するとは、作り直すことである。

出て来た答を見ると、理解するとは、自分の言葉で言い直すことが出来ることだとある。機械の働きを理解するとは、部分間のつながりを把握すること、ある部分が別の部分を如何に助動するかを示すことが出来ることである。人のすることを理解するとは、どのようにして、また何故そうするかを言うことが出来ることである。一般に理解するとは、言葉とかシンボル、イメージ、経験と言った自分が自由に使える要素でもって、示された情報を心的に再構築するre-construireことだと言われる。

働きのシェーマを作り、テキストのプランを示し、レジメを書くことは、理解したことを示す仕方である。図式や要旨を作

組織し、その情報に意味を与えることを迫られるが、それこそ理解するために為すべきことなのである³⁷⁾。

3)、作り直すとは、プランを作る、シェーマを作ることである。

理解したことを示すとは、部分が全体の中でどう連結し合っているかを示すことである。このつながりを示すには、プランはとても役に立つ手段である。

(演習題12. 2) あるテキストのプランを作るためにどうするかを書き表すこと。読み続ける前に、自分の答を書くこと。

それぞれ一つの意味をもちつつ、しかも一つの理念に収約される様々な部分にテキストを分割することが、如何にして可能かを探究することである。テキストのプランを作るには、分割し分析し、部分間の関係を探り、再構築を試みる。そのためには、区別した様々な理念を、ただ単に一つずつ記述すると共に、他方部分間の関係を示す〈デッサン〉を作ることが出来よう。

(演習題12. 3) テキストの分割と再構築の作業をすること。

プランは、多くの事実の時間的継起か、多くの観念の論理的連鎖を、目に見えるように現われさせる。プランは又、物事を列挙する場合に、並置する関係を明らかにする。それはまた、似たものの再グループ化である分類をすることでもあれば、比べて見る場合の重要性を示す基準に従っての組織である配列をすることでもある。

始めに単純に直線的プランを作った上で、それだけでは気づかないまになる恐れがあるデータをより細かに発見させる所から「発見的図式」と呼ばれる図式の助けを借りて、専門用語間の接続関係を示すことが出来れば、テキストの本質を心に刻ませるようなプランを出現させることになるから、大変興味深いであろう。次の課題で見られるように、重要資料を前もって組織することによって、記憶は大幅に助けられる。対称法的な輪郭図(デッサン)でもって内容を調和させるような形

で、プランを示すことも出来る。対称図式は、プラン再構成の際、欠けているものを一層容易に見させるであろう。

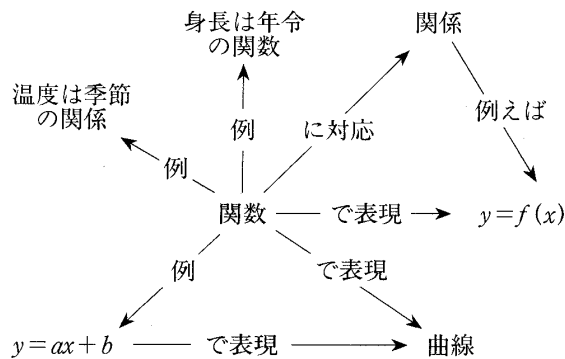
(演習題12. 4) プラン、シェーマの形で、目的実現のための諸達成課題の続き具合を、表象させること³⁸⁾。

4)、知識は一つは網の目を形作る。

網の目の図式の形で、自分の知っていることを組立て直すことも出来る。「概念表」とは、ある分野で自分の知っている概念(コンセプト)や観念(ノーション)の間の関係図のことである。数学の「関数」に関する知識を修正する場合、真中に関数の語を書き入れ、心に思い浮かぶ全術語を、これに結びつけ直すのである。その関係線上に、その意味を書き込む。

(演習題12. 5) いま学んでいるコンセプトを選び、その周りに概念表を作ること。

学ぶとは、一つの網の目を、それがくっきりと浮彫りにされたばかりのように、中味を豊富にすることである。一年のうち様々の時



点で、網目の輪郭をはっきりさせておくなら、それがどのように進化発展するか、自分の人間形成の展開につれて、どのように改造されて行くかが分るだろう。友達や親に頼んで、自分にはっきり分らないことを説明してくれるようなシェーマを、くっきりとした形で見せて貰うようにするとよい。それは意志や考えを伝達するには、とても興味のある方法だと云えよう。そうすれば、理解したつもりでいることを、はっきりさせなければならなくなるだろう³⁹⁾。

5)、留意点。

プラン、シェーマ、レジュメは、何を理解しているかを示す手立てである、一層よく理解するために、プランを描き、レジュメを作り、理解すべきことを自分流に簡略化しよう努めることが、大切である。

(演習題12. 6) 理解するとはどういうことか。自分が理解したことを、どのように示すか。この二つの問いに答えること。

(演習題12. 7) 学習について知っていることを、シェーマの形で要約し、このシェーマを記憶すること。

6)、実施点。

(実践題12. 1) 自分が理解しているデータの接続関係を示すシェーマや図表^{グラフ}を作るために、自分の教育の中であらゆる機会を利用すること。——そうしたら、学習とは何かについて自分の知っていることを、自分なりに要約することが出来るだろうか。

【課題13】 第13テーマ：学習技術としての記憶。

学習では、記憶がどれほど重要か。学習に当たって、問題の新しい解法を見出すことかた始めたとしても、その解法を記憶していな3つたら、後になっての役に立たない。どうしたら良く記憶することが出来るかは、重要な学習課題の一つである。

1)、何を記憶しようと努力するのか。

問題の解き方や自分のやり方から始めて、自分の周りの調査に進むが、こういった反省のおかげで、自分自身のやり方のよりよい自覚に至ることを望むものである。学習において自分がいかに振舞うかをよく知り、他人がいかに対蹠するかを学ぶことを通して、始めて自分のやり方を次第次第に改善して行くことが出来る。

(演習題13. 1) 記憶に努力してみて、記憶するのが容易なことと困難なことを区別して、図表の形で整理すること。この表から、どんなことが言えるか。自分が記憶している色々な事に、何か共通なものがあるか。

何か記憶しようと求める場合、その情報に何か役に立つことや興味のあることを見つけ、別の重要事項にそれを結びつけ直す仕方を見つけることが、大事である。容易に記憶することが出来るのは、多分事実の分野に属する。

2)、記憶するために、自分はどうするか。

他人はどうするか。

調査から始めるが、教師はこの問いへの答を集めるために、クラスやグループでのやりとりに参加するように勧めるだろうが、自分自身もこの問いに答えられるために、友達や家族と対話するであろう。

(演習題13. 2) 自分が勉強しなければならない学課内容を記憶し、そこで自分が利用した手続きを再構成すること。自分がよく知っている答を、学校や学校以外の所で思い出し、どのようにしてそれが記憶できたかを思い出すよう努めること。その答を記憶するために利用した状況を、課題と事情の両面で指定することを通して、その手続きを記述すること。このような扱いでもって、満足できる結果に達したか否か。

(演習題13. 3) いろいろ違った手続きを図表の形で分類すること。分類の原則がどんなものになるか、色々なやり方をしてみても区別することが出来るかどうかを、見ること。

(演習題13. 4) 記憶の手続きにおいて、相次いで起こる局面を区別することが出来るかどうか。それらの局面はどんなものか。

3)、記憶作用に関する成果のいくつか。

〔反復、時間の中でのその配分〕

アンケートを分析すると、記憶に必要なのは繰り返しである。記憶するためには繰り返し、記憶を維持するためには周期的反復の要がある。繰り返しは周期が短かすぎてもいけないし、一時に多事の記憶を期待しても無理である。時間的に適正に配分された学習は、団塊の学習よりも秀れている。本当に知ることを欲し、必要な時いつでも役立てられることを望むなら、学んだことを規則正しく修正するのを忘れないことである。一つの〈自動作用〉に達することが問題なのである⁴⁰⁾。

〔記憶する前に組織すること〕

(演習題13. 5) 反復による記憶の前に、どんなことをしたらよいか。資料を直接利用すること、その資料に適切な変形を加えること。

記憶する前に、記憶すべき情報を整理し組織することが重要である。記憶したい語は、例えば一覧表として羅列して示される時よりも、句や文としてある形態の中に構成されている時の方が、記憶し易い。記憶したい項目同士を相互に結びつけ直す仕方を発見することが大切である。関係づけの型は、事の内容に適わしい場合もあるが、全く人工的なわざとらしい場合もある。どうしても自然な関係が見つからない時には、もともと関係のないものを無理やり理屈づける人工的策略である記憶術の助けを借りるのも好かろう。覚えるべき語がいくつもある場合、それらの語の初めの文字を集めて、新しい語を作る。又その語から一つの話を作ったり、その語に対応する物に出会う道順を作ったり、その語のイメージを再発見できるよう部屋の色んな隅で思い描くのである。

(演習題13. 6) 自分が続けている学習のために、これらの手立てを利用して、そこで見つかる興味や出会う困難に注目すること。

前の例では語の意味から出発したが、リズムを記憶して、それに運動を結びつけるのも効果がある。語や数の継起のリズムを記憶すること。⁴¹⁾

〔心像の喚起〕

組織されると、今度はその再構成された内容を表象することが問題になる。内容についての心像をもつことが大切だが、心像は視覚的・聴覚的であるから、何かを見たり、語・句の発声を聞くことである。

(演習題13. 7) 色々な物事や色々な文言の組織を目に見えるようにしたり、紙の上に書かれるのを注視するように練習すること。

4)、記憶するには、学んだことを活用すること。

記憶に必要な諸局面。

——資料を組織する（自然な結びつきを発見したり、人工的なシェーマやプランを樹立したり、意味やりズムに従ったり、ある身振りに結びつけたりして。）

——この組織を心の中に描き出す。

——この組織の仕組みを呟いてみたり、書き直したりして、くりかえす。

——繰り返すことが、覚えたいことと良く合っているのを、その都度確かめては繰り返す。

（演習題13. 8）この手続きを数日実行した後、次の問いに答えること。

——こうして見て得た効果はどんなものか。

——自分が特に良いと思う組織の仕方は、どんなものか。

これらの忠告は、効果的に活用する場合にしか利益がない。学ぶとは、新しい行動や新しい仕方を獲得し、その上でそれを改良しようと絶えず試みながら、その実行を図ることである。

5)、留意点。

（演習題13. 9）上記助言を活用して、次の文を記憶すること。〈記憶するとは、先ず組織することであり、次いで利用して繰り返すことである〉、と。

6) 実施点。

（実践題13. 1）4）で提案したように、多様な組織の仕方を想像しながら、実施すること。記憶したいことの心像を作ること。自分のやり方に注意すること。

〔課題14〕 第14テーマ：学んだこと

は本当に役に立つ。

これまで提案して来た学び方を実験すること。学校用の勉強に活用して欲しいが、またスポーツや趣味の世界で何か新しいことを学ぶ時にも、余暇の折にも、役に立つ。

1)、自分が何を学び得たかを見直すこと。

（演習題14. 1）これまでの課題やテーマで、どれが一番重要に見えたか。

先きへ進む前に、書いてこの問いに答えること。よく思い出せなかったら、色々な課題

やテーマを見直し、下線の引いてある個所をコピーすること。記憶したことを、重要さの順に分類すること。——またここで提案した同じ学習を試みた友達と討議し、特に最初のテーマで調査した相手に、そのことについて話すとよい。

これまでに学び得たことを整理すると、次の三つの要点に要約されるであろう。

——学ぶとは、新しい言い方、仕方、振舞い方を手に入れることである。

——この新しい言い方、仕方、振舞い方を実施するには、見、聞き、読み・実験する時に情報を活用する仕方を知っておく必要がある。場合によっては、この新しい言い方、仕方、振舞い方を作り出すのに必要な情報を探さなくてはならない。その時にこそ、既に知っていることと新しい情報との間に繋がりが作り出され、新しい行動が構築されるのである。

——この新しい言い方、仕方、振舞い方を一旦獲得したら、今度はそれらを改良して、必要な時いつでも自由に活用できるようにするために、それらを実行することが大切である⁴²⁾。

2)、それは何時役に立つのか。

（演習題14. 2）このテキストから学んだことを、どんな時、どんな事情において利用することが出来たか。数週間の中にそれを利用する場合、それがどんな役に立つかに注意すること。

3)、多くの試みは役に立つが、うまく事情に適合させることが必要である。

様々な方法もあり実例もあるが、自分のやり方を選ぶのは自分自身である。聞いたり見たり実験したりする場合、人はそれぞれ違った仕方です。表象の仕方の多様さもあれば、プランやシェーマの多様さもある。それらをうまく自分に適合させることが、一人ひとりの仕事である。

状況がどれだけ違っていても、学習の仕方は各人にとっては同じままだということが、大事な点である。日常生活場面でも学校状況

であっても同じく対応することが出来る最も重要な道具の一つを、そこで持っていることになる。それを活用することを忘れないのが大切である⁴³⁾。

4)、留意点。

(演習題14. 3) 以上に述べたことを、自分の仕方で言い表わすこと。自分流の定式化の仕方を確認して、それを記憶すること。知識も活動方法も、使わなければ失われる。

この「援助計画」の始めからの留意点を見直し、コピーして何度も読み直すこと。

5)、実施点。

現在の自分の発達段階として示されていることを実行し、初めの数課題での演習や調査をもう一度やることが望ましい。手続きの全体をよりよく理解するために、目標や企画に立ち戻って、学習が漸進的方法によって為されることを思い出すことが大事である。これまでの諸課題をもう一度読み直すことは、その後での読書と共に、新しい細部を漸進的に発見することを可能にする。

(実践題14. 1) 学習の仕方で特に重要に思えたことは、出来るだけ完全に应用することが出来るだけの時間をとること。自分のしたことと、その結果についての観察に注目すること。

【課題15】 第15テーマ：評価と展望。

最後の課題は、自分の位置を見定めるのを可能にすることである。自分が得たものと、更に学び得ると期待していることとに注意する配慮である。

1)、出発点としてのアンケートの意義。

仲間や同僚と共に自分自身に問うた初めのアンケートと、進行につれて現われて来た細部とは、ほかの人や自分が如何に学ぶかを注視することを可能にする〈眼鏡〉や〈観察格子〉となり、それを自由に使用することが出来るようにする。

学習の仕方の分析格子

——学習の始めと途中での自分自身に対する態度：自信、毅然たる態度。

——包括的目標と部分的目標。

——状況：課題の予約とその順序。課題の特徴としての事情（継続期間、使用用具、グループ）

——課題の遂行

・見つめ、聞き、触れることを通して。

・合理的か直観的な仕方で。

・暗記し、理解に努め、手を使うことを通して。

——得られ結果。

44)

この格子は、学ぶためにどのように振舞うかを記述することを許すものである。

(演習題15. 1) この格子を、自分が使えるように書き改めること。そして〔課題13〕で示された記憶の仕方でもって、この格子を記憶すること。

2)、学習の組織。

学習の組織に当って出会う実際の困難は、この格子を使うことによって、位置づけ、名付けられることが出来よう。態度、目標、状況、或いは対応する課題の実施の仕方のどの水準に、その困難は位置するか。

(演習題15. 2) 個別的学習ケースの分析として、この「学習能力発達援助計画」の分析を使うことが出来よう。この計画をどのように活動させたか、そこからどんな結果を引き出すか、以下の問いに答えること。

——自分自身と、このプログラムに対する自分の態度は、どのようなものだったか。

——自分の学び方において、自分は進歩したと考えたか。そして今は？

——本当に目標に達することを願ったか。どの目標に？

——そして今、自分の目標をもっとよく表明することが出来るか。

——プログラム以外のどんな課題を、自分

に与えたか。

——課題をどのように実施したか。自分の学び方を効果があがるように作り直そうと努めてか、それともそうでなくか⁴⁵⁾。

3)、自分の学び方の改良。

困難を位置づけることが出来たら、そこへ努力を持って行くことが大切である。

(演習題15. 3) 前演習題を再度とり上げ、自分が選んだ学習にあてはめること。困難の性質や起源を探究し、書いて答えること。

4)、留意点。

自分の学習の仕方とその結果を分析し、他人のやり方がどんなものになり得るかを探り、新しいやり方とその結果とを実験することによって、学習することを教えられる。

(演習題15. 4) この仕方を、シェーマの形で表すこと。そしてそのシェーマでもって、自分の行動原理を作ること。

5)、実施点。

(実践題15. 1) 自分と同じ困難をかかえた友と、困難を感じない友とを探し出すこと。両方の友だちと一緒に学習グループを作ることが出来たら、相互のやり方を交換することによって、自分の学習の組織の仕方と実行の仕方とを修正することが出来るような方式を、考え出すことが出来るのではないか。

〔結論、ないし深化のための総合〕

様々な演習をしてみて、様々な助言の意味が分るのではないだろうか。言われたことを応用し、その成果を観察するため、新しい学習を活用することが大切である。

各自に発見することが望まれること。

・ある学習に取り組むには、その興味深さと有用性、及びその学習に成功する能力とを、確信している要がある。——どんな学習も進歩することを可能にする。——学習には、自己と他者に対する信頼が前提になる。

・達すべき目標について明晰な考えを持つことが必要である。

・学習は状況を前提とする。各学習状況は、注意と理解と記憶を必要とし、次いでその利

用や再利用を想定する。——各状況は、個人としての参加姿勢、勉強技術アンガージュマン(シェーマや記憶)、先行知識の動員、身心の良い形を前提する。

・どんなことであっても、その仕方を改善し、それをすることの意味を探究する配慮と共になされねばならない。

学習に当たって為すべきことを発見するために為すべきこととしては、

・自分のしている学習は、どの点で自分の役に立つか、自分が何をすることが出来るようにしてくれるかを探ること。その利害関係を見て、自分を信頼すること。

・学習が終わったら、何が出来るようになりたいか、できるだけ明確に述べること。この全体目標を部分目標に分割すること。

・自分の望む行動を生み出すのに必要な状況を設定すること。読書、レジュメ、プラン、シェーマに丹精し、記憶作用を鍛え、身心のフォルムを保持すること。

・必要な先行知識を動員すること。

・自分のすることに距離をおいて、そのことを明白にし、自分のやり方を観察し、新しいやり方を実験すること。

心に留めるべきことと、為すべきことは⁴⁶⁾、このようなものであると、ベルボームは言うのである。

上来所論の全体を見ると、自己実現さるべき存在としての人間の基礎構造を形作っている発達段階を乗り越えさせて、独自の成長を促すものとして学習を把える立場に立つところから、先ず内的動因としての「学習意欲」の根源性に注目すると同時に、その意欲の発動や展開を現実世界の様々な阻害要因の中で促進させる「援助する働き」の指導性を改めて確認するところから、出発する(第1課題から第4課題まで)。

しかし学習の成否は、学習活動を組織的に発展させる「学習計画」の存否にかかると見るところに、学習能力発達の支援構想の中心が置かれる。学習計画は、相次ぐ目標と、こ

れに呼応する状況の設定から成る。それは、最終目標と、これに至る順次的な中間目標群の全体である一方、この目標群に対応して、学ぶために為すべきこととしての「課題」と、その課題を遂行すべき場としての「事情」とから成る諸状況の継起として、把えられる。そしてこのプロジェクトを、友達や教師たちと討議して、学習組織を作り出すことの意義と工夫とが強調されるのである（第5、第6、第7、第9課題）。

つづいて学習活動を左右する要因として、学習すべき新しい知識に対して、どのような既成の先行知識をどれだけ持っているか、又どのような形でそれを整理したらよいかと言う謂わば客観的知的要因が見直されると共に、学習者の過去の成功やそれに対する他者の評価から生まれて来る「自己への信頼」ならびに学習者の心身の状態とその改善という主体的感性的要因が重視される（第8、第10、第11課題）。

学習技術として特に推挙されるのは、「理解」の「計画」や「図式」の形成の仕方と、「記憶」作用の構造的組織化の推進とが、伝統的学習方法の改善・発展の方向づけとして提示される（第12、第13課題）。

最後に学習の深い有用性や有効性を強調しながら、学習の組織や学習の仕方の改良をめざしての評価と展望の確立が図られる（第14、第15課題）のである。

そしてこの構想の根本のところでは、前論文で示されたように、学習とは、環境との相制関係を背景とする現在の活動を活かして、新しい行動様式を造り出したり造り直したりすることにあるが、この改造や創造の働きは、学習者の外からの客観的な「条件づけ」という行動主義的方法によると同時に、学習者自身の内からの主体的な「意識的努力」としての自覚の方法によるとされるのである。

この二つの方法を根底において、これまでの学習理論を大きく整理するところから生まれて来たものであるから、上乗の諸提案は、それ自体としては、今日すでに一般化して多

分に常識の中に生かされるものとなっていると言わざるを得ないが、こうして学習方法の根幹や細部として組織され位置づけられると、諸技術や諸方法がその底にもっている独自の深い含蓄を甦えさせられるのを感じて、全体としてある新鮮さの発見において、感動的でさえあると言うことが出来よう。科学と同時に体験の価値的体系化をはかり、客観的なものとして組織されると同時にその内面的主体化として人間自身のものとなったとき始めて、どんなに科学的なものもその本来の意味を見出すのではないか、と思われることである。

提案は、各自の学習や勉学を学び方の実験として位置づけることによって、学習とその方法の改善に向けて、科学性に共に主体性を確立しようと試みているのが窺われる。問題に適合するだけでなく、問題を更に発展させることになる様々な演習方法を工夫していて、生徒の学び方にも教師の教え方にも貴重な暗示や助言を与えるものとなっている。

生徒に対するアンケートを相当規模に行なって、その成果を大いに生かそうとする姿勢において、学習の現場としての個々のケースに対する凝視は、一般的な学習心理の科学的な分析や合理化にとどまらず、感情と共に特に身体と精神との接点に深く配慮するところがあるのを覚える。その点で、近代以前からの伝統的な知恵、アジアの知恵ともつながって行くところが窺われ、知識と異なった位置に立つ「知恵」が単に古びてしまっているものではなく、たえず新しく生れ変わることできる働きを内に潜めている事実を思い起こさせるものとなっている。このような思想的背景において、提案される学習や教授の諸方法は、学校的な勉強に局限されることなく、生涯学習的展望においてスポーツや趣味、余暇活動にも大きく広がり渡る視野の広大さの中で、つまり人間的生活の真只中で生き返らされていることを感取させるものとなっている。

つまり、特別な知的抽象的な隔離された薬品の匂いがする人工的世界から、普通の人間

の世界に戻って来た時の学習活動のみづみづしさに目を見張らされるものである。従ってそれは最後のところでは、今日のいわゆる先進国をも開発途上国をも歪んだ形で支配する現代文明の汚点に毒された知のあり方、学びと教えのあり方にまで、反省や自覚を促す力ともなっている。つまり科学的行動主義理論を中心とするあまり、その限界をカバーする点においてだけ、意識の内省的自覚の努力を評価する精神活動を徹底することを通して、科学理論の諸側面を、人間を全体として生かす方向において見直すことを、本提案は最後の課題として読者に迫るものとなっていることが、指摘されておく要があると思うのである。

〔註〕

- 1) J. Berbaum: Povr mieux apprendre, ESF, Paris, 1992——この著作が本論文で支柱をなす研究であるが、前論文で検討した同じ著者の次著は、本著の問題提起の背景をなす理論的分析をなすものであるので、前論文ともども常に考え合わせる形で参照されることを期待する。
- J. Berbaum: Développer la capacité d'apprendre, ESF, Paris, 1991
- 2) J. Berbaum: Povr mieux apprendre, p.15. J. Berbaum: Développer la capacité d'apprendre, p.13.
- 3) Ibid, p,17
- 4) Ibid, p,18
- 5) Ibid, p,19
- 6) Ibid, pp,19~20
- 7) Ibid, p,20
- 8) Ibid, pp,21~22
- 9) Ibid, p,24
- 10) Ibid, p,26
- 11) Ibid, pp,31~32
- 12) Ibid, pp,34~35
- 13) Ibid, p,38
- 14) Ibid, p,42
- 15) Ibid, pp,44~46
- 16) Ibid, p,47
- 17) Ibid, p,49
- 18) Ibid, p,51
- 19) Ibid, p,52
- 20) Ibid, p,53
- 21) Ibid, p,55
- 22) Ibid, p,57
- 23) Ibid, pp,58~60
- 24) Ibid, p,61
- 25) Ibid, pp,64~65
- 26) Ibid, p,66
- 27) Ibid, pp,69~70
- 28) Ibid, p,70
- 29) Ibid, pp,73~74
- 30) Ibid, p,75
- 31) Ibid, p,77
- 32) Ibid, p,78
- 33) Ibid, p,81
- 34) Ibid, p,82
- 35) 芦田恵之助：静座と教育、昭和12年
同著：恵雨自伝、昭和25年、開顕社 等参照。
- 36) J. Berbaum: op, it, p,83
- 37) Ibid, pp,85~86
- 38) Ibid, pp,86~87
- 39) Ibid, pp,88~89
- 40) Ibid, pp,91~92
- 41) Ibid, pp,92~93
- 42) Ibid, p,95
- 43) Ibid, p,97
- 44) Ibid, p,99
- 45) Ibid, p,100
- 46) Ibid, pp,103~104